

『日本近世小説と中国小説』概要書

徳田 武

本論文は、序章、第一部 読本前史、第二部 読本の成立、第三部 長編読本の成立と展開、第四部 読本と近代小説、という構成を採り、第一部から第四部に到るまですべて三九章の論文を収める。

序章においては、本論文で扱う対象・研究の意義と目的・本論文によって得られる文学

史的展望・研究方法などに就いて概述した。
すなわち、本論文で扱う対象とは、日本近世
小説の内でも特に読本と称される作品群であ
る。読本とは、日本近世の多様な小説分野の
内でも最も多くを中国小説に学び、それを基
として日本文学として別様に創造されていっ
た小説である。従って、どのような中国小説
の如何なる処を採り入れて新たなものを創っ
ていったかを考究すれば、日本小説と中国小
説の同質性と異質性、日本人の創造能力のあ

りようが明らかになつてくる。そしてそのことは、いつの時代においても外国文化に敏感で、それを日本化することとを常態とする日本人の創造能力を考えることにもつながる。

読本とはまた、坪内逍遙の『小説神髓』が問題としてゐることに窺えるように、西洋小説と並んで近代小説の成立を準備した小説群である。だから、近代小説の発生を知るためには読本を知らなければならぬ。

本論文の主題を扱うことには以上のような

意義があるのであり、この意義から自ら導き
出されてくるのだが、本論文の目的は、日本
近世において中国小説が受容され、それに基
いて読本が発生し、日本の長編小説として結
実し、近代小説に発展的に解消して行く様相
を明らかにする所に在る。

その様相、即ち文学史的展望は、前記の構成から
窺える如く、大きく四期に分けてなすことが
できよう。第一期は、元禄から享保に及ぶ時
期である。この時期は唐話学がまだ殆ど起ら

ず、白話小説を読解できる人は稀有である。
か、歴史の動乱を演義小説化した長編の中国
講史小説は、文言体を基調としていたので大
いに翻訳された。その翻訳には部分的に翻案
がまじりこむ場合も多く、享保期になるこ
翻案の度が進んで原作と別様の小説に創り変
えた作品も出現する。即ち、後期の長編小説
の萌芽とも見なされる作品が生まれるのであ
るが、しかし未だ純粹な読本の形態を備えて
はいない。かかる作品が出ずるまでの時期は

、純粹な讀本の誕生を準備した時期、即ち「讀本前史」として把握すべきであらう。

第二期は、讀本の嚆矢とされる『本草紙』が上方に出現する寛延二年より、讀本が大眾化する寛政・享和の交りまでの時期である。この時期の作品は、多く文人・知識人によって著され、作風は高踏的である。とりわけ都賀庭鐘は白話小説通で、多くの短編白話小説を翻案しているが、『本草紙』から『繁野話』、『芳句冊』と移るにつれ、日本の軍記や巷

説をも取り入れて自らの創造部分を増やす、
という作風の推移を見せている。読本日本化
への道程を歩んだのである。夜鐘のそうした
歩みを中心として、文人・知識人作家の作品
にフットワークをしてみた。

第三期は、享和・寛政の交より幕末に至る
時期である。この時期は、職業的戯作者によ
って大量に読本が生産され、読者も飛躍的に
増加して、作風は大衆化された。しかも長編
小説が主流となる。そうした長編読本の形成

過程を歩んだ作家が馬琴であって、彼の作風
 の変化を追求することは、この期の読本史を
 追求することにも通じる。そこで白話小説の
 受容という観点を中心として、^{また}馬琴の創造過
 程を追跡し、長編読本の成り立ち展開について叙
 述した。

第四期は、読本の創作は絶え、近代小説が
 誕生してゆく間に、僅かに日本文学のよう
 な傑作のみはまた読まれて、近代作家の創作
 に影響を及ぼす力を保っていた明治期である。

坪内逍遙と幸田露伴は近代小説の成立に大きな働きをなした。しかも近世小説通でもあったので、この二人に就いて読本が近代小説の誕生に影響を与えている様態を考えてみた。

9
右の如き展望をもたらした研究を行うに当たって、主として用いた方法は、当然に比較文学的方法となる。それは第一に、如何なる日本小説と中国小説の間に関連があるのかを特定することから始まる。日本小説が翻訳であるならば、その原作を訳者が扱った版本による

で絞って搜索し、翻案であるならば、その粉
 本を確定しなければならぬ。その際の検証^④に
^{用いられる事例}
^{使用}文章の導入である。ニラして原作や粉本が確
 定されたならば、第二に、翻案の場合には、
 彼我の作品のどこが同じであり、いずこが異
 なるかを吟味することになる。同じである部
 分は、中国から日本に取り入れた点なので
 あり、異なる部分は、取り入れることができ
 ないか取り入れたくならなかったかする点のた

と普通には考えられる。従つて、同じであ
 る点に就いていえば、日本の作者が何を取り
 入れたか、たゞかを考へることになる。異な
 つてゐる点についていえば、なぜ翻案者が変
 えたのか、その理由を分析する必要が生じる
 。その理由は大きく二つに分れることかでき
 よう。一は、日本と中国の国情と国民性の相
 違に由来する。一は、原作や粉本の作意及び
 芸術的達成に不足を感じ、これを補おうとす
 ることに由来する。だから、相違を考へるこ

とは、両国の国情と国民性の相違を考えることでもあるし、両者の芸術的達成度を較量することでもある。この場合、異同を検討する対象は、構成・筋・趣向・語句は勿論のこと、主題・思想などの抽象的なものをも含める。

以上の如き方法は、翻案作品の芸術性を科学的に考察するための方法でもある。構成・筋・趣向・語句・主題・思想の検討は、文学としてあらしめる要素の考察だからで

あり、粉本と比較しながら検討することは、
 翻案作品の芸術的達成^度をより明確に客観的に
 把握することであるからでもある。無論、芸
 術性を科学的に考察するための方法は、様々
 にある。作品の面白さを引き出すためには、
 場合／＼によつてそれに適わしい方法を用い
 る。なければならぬ。
 筆者は、
 明らかに配慮をも働かせて
 いる。

第一部 読本前史

第一章 中国諸史小説之通俗軍談——読本前史——

近世前期に大量に刊行された通俗軍談の殆
んどは、中国講史小説の翻訳であるが、その
原作は何か、また原作の中でもどのような版
本に拠ったものなのか、そしてそれをどのよ
うな態度で翻訳しているのか、といった問題
は解明されていなかった。そこで筆者は、次

の如く通俗軍談とその原作の関係を確定させ
る物が少なくない。

ている。これらの原作は、中国では佚してい

通俗三国志（元禄二、五年刊）——オオノチカ
生批評 三国志

通俗漢楚軍談（元禄八年）——重刻 西漢通俗演義

通俗唐太宗軍鑑（元禄九年）——新刻傳鑑唐國志伝

通俗列國志前編（宝永十二年）——新編陳留公春秋列國志伝

通俗南北朝軍談（宝永二年）——精編通梁武帝西來演義

通俗北魏南梁軍談（同右）——同右

通俗列國志十二朝軍談（正徳二年）——刻傳鑑通列國前編十

通俗宋史軍談（享保四年）——全像接南宋志伝

通俗西國志（享保六年）——新刻大宋中興通俗演義

これらの内で、筆者は、通俗漢楚軍談

通俗南北朝軍談通俗北魏南梁軍談

通俗宋史軍談の翻訳ばかりを原作と対照し

つ検討し、それらは唐語学が勃興する以前に
早くも原作の白話を翻訳してゐることを例証
した。それは、白話の翻訳は享保以後に唐語
学が興つてから後のことである、とソラ從來
の通説を修正したものである。

次に筆名は^く通俗而漢紀事(元禄十二句

序)を採りあげ、本書が稀覯本たる^く京本通俗

漢志伝とその異版たる^く京板金像西漢開國中興

^{按鑑音釈}

伝誌とを翻訳し始めてゐることを指摘し、

しかし訳者は次第にその二原作を訳すること

をやめて『資治通鑑』を利用するようになる
て行く、という様相を詳しく検討する。そし
て、そのように複数の小説と史書を利用して
前漢・後漢の歴史と人間模様を綴ってゆく著
者の方法は、翻訳というよりも、すでに翻案
であり、後の読本作者の方法と同質のものが
見出されると述べ、その^{ついで}長編読本の前駆的
な作品と位置づける。また、同様な様相が『
通俗西国志』等にも見出されることを付加す
る。

筆者が新たに指摘した前記の如き中国講史
 小説は、中国では佚した稀覯書が大部分であ
 り、従つて中国文学史研究の側でも日中双方
 の研究者が取り上げている作品群であるが
 、筆者はそれらを新たに日中比較文学研究の
 俎上に上せたわけである。また、我国の通俗
 軍談に關する研究は従来殆んど無かつたので
 あるが、その原作を確定し、翻訳の様相を検
 討し、讀本前史として史的位置付けを行つた
 のは、筆者が最初である。

これより以下、第二章から第六章までは、
 第一章で立てた文学史的展望を~~固~~固めたものの
 個別的な事例を検討したものである。するわ
 ち第二章「通俗三国志」の記名には、同書
 の記名湖南文山こと義轍・月堂兄弟が、「通
 俗漢楚軍談」の著者であり夢梅軒章峯・林好
 軒徽庵兄弟と同一人であることを~~考~~証したも
 のであり、石崎又造著^{近世日本に於ける}支那俗語文学史
 に昭和十五年刊よりこのかた全く誤却~~誤~~
 されていた湖南文山に新たな照明を浴びせた

論考である。

第三章

『日

制
裁
締
結

三國誌後伝

と『通俗続三國

志』には、第一章執筆の時点では調査するこ

とができなかつた西書の関係に就いて明らか

にした論考である。『三國誌後伝』の原本は

北京図書館から台湾また米国国会図書館と転

々と移動したものであるが、筆者は中国留学の

機会に北京図書館蔵のマイクロフィルムに

よって本書を閲覧し、本書が『通俗続三國志

』と『通俗続後三國志』の原作であることを明

らかにし、その翻訳と翻案の入りまじり
 を検討してゐる。そして、この二つの通俗軍
 談も読本前史としての位置を搏つと論ずるの
 である。これも日中双方の研究者が全く着手
 してゐない作品に照明を当てた論考である。
 第四章「通俗元明軍談」と「英烈伝」は、
 岡嶋冠山記の「通俗元明軍談」が「英烈
 伝」の翻訳であることは早くから指摘されて
 いたが、可英烈伝には明版の楊明峯本系の
 本文と清になつてから改作された可雲合奇蹤

訳し
 よう

凡系の本文との二種類があり、双方の本文は
 大きく異なること、眉山は楊明峯本系の本文
 を忠実に訳していること、楊明峯本^系と日雲合
 奇蹤凡系の異同は要するに日英烈伝が歴史
 記録から虚構の方向に改編されていったこと
 に由来すること等に就いて解明したものであ
 る。日英烈伝の明版に因する研究は、これ
 また日中双方に亘って為されていく、筆者
 が初めて清版との異同や日通俗元明軍談との
 の関係を描描したのである。

第五章「通俗台湾軍談」と「靖台実録」
 は、通俗台湾軍談が台湾の朱一貴の乱
 を記した史書、靖台実録を粉本とし、それ
 を通俗軍談風の読物に作り変えていることを
 検討し、享保八年の時点になると、読本の方
 法と殆んど変らぬ通俗軍談が著わされている
 ことを論いたものである。第六章「仙説
文耆婆経」の「通俗医王耆婆伝」も、仙典
 を粉本として読本と変らぬ方法を以て製作
 された「医王耆婆伝」が、宝暦一三年の時点、

においては通俗書として見るされていたこと
を述べ、通俗軍談や通俗書が読本前史として
の位置を占めることを確認した論考である。

前に触れた如く、元禄から享保にかけて量
産された通俗軍談を文学史に位置づけた研究
は、従来存在しなかったのであるが、本書の
第一部は、そうした文学史の空白を埋めたも
のとしての意義を持つであろう。

第二部 読本の成立

第一章 「日英草紙」と三言一「俗に即して

雅を爲すしは、読本の嚆矢といわれたり
 夷草紙が三言と総称される短編白話小説集
 を翻案することによって、俗文学として輕視
 されていた小説を雅文学に匹敵するよう高
 度の文芸に上昇させた、と論じたものである
 。筆者はその例証として、夷草紙の數話
 と三言の内の數話の翻案關係に就いて述べる
 のであるが、特に第八話「白水翁が売ト直言
 奇を示す話」と「三現身包蔵凶断寛」(警世
 通言一三)の關係を論じた部分は、「白水翁

上の話に『万葉集』や『大和物語』中の^源菟^原女伝説が隠微な形で融合されていることを新たに指摘したものである。

第二章『都賀夜鐘 遊戯の方法』『英草紙』に『繁野話』と唐代小説・三言一は、夜鐘の第二作『繁野話』の三話と三言・唐代小説『任氏伝』の関係に就いて考え、等しく翻案であるとはいっても三話がそれぞれ異なる翻案方法を開発していることを闡明し、『英草紙』において既に確立されていた知的遊戯

としての意味をも備えていた日本化の方法が、
 『警野話』においては更に発展させられて
 いる、と論じたものである。『警野話』に因
 する本格的な研究の最初の物である。

第三章『素御官人ニ子を唐土に携ふる話』
 と『異称日本伝』は、『警野話』の第四話
 が謡曲『唐船』の設定を逆にした上で、『異
 称日本伝』中の『武備志』や『圖書繪』の宋
 素卿肉保の記載を取り込んで話を作っている
 様相を解明したもので、典故の新たな指摘で

ある。

第四章「夜鐘」と西湖佳話に聊齋志異に
 一、可琴句冊に第三篇覺書しは、夜鐘が第三
 作の可琴句冊にまたもや菟原如女伝説を採
 りあげ、それを西湖佳話に六「西冷韵迹」
 と聊齋志異に十一「恒娘」の二話を繋ぎ合わ
 せるかたちで語つてゐることを解明し、夜鐘
 が最初の聊齋志異の翻案者たる光栄を荷
 う者であることを指摘してゐる。

第五章「夜鐘」と四声猿に可琴句冊に第

六篇一は、吉野捏々人^{じんげん}間に遊て歌舞を伝
 える話、明の徐文長の戯曲^集四声猿の中の
 狂鼓史漁陽三弄をどのよう^にに翻案している
 かを検討し、庭鐘が近世文学史において最初
 に難解な中国戯曲を翻案した作者であると指
 摘した。

第六章「万葉句冊」と足利季世記には
 一第ハ話「猥瑣道人水品を并じ五管の音を知
 る話」が幸田露伴の「雪たたき」と同一の話
 を扱っていることにヒントを得て、その粉本

を「足利季世記」の「^白山記」の「雪々々」
 ノ事」に求め、庭鐘が難解な小説造りを行っ
 てゐる様を考え、その難解さは、粉本を中国
 白話小説ではなくて日本の軍記に求めること
 によつて日本化しようとする^{と云ふ}意図から発せら
 れたものであることを論じてゐる。

以上の庭鐘関係の論考は、すべて粉本を新
 たに指摘したか、または新見を提示してゐる
 かした物であり、従来、秋成に比する之遙か
 に遅れてゐた庭鐘の研究を大きく進展させた

ものである。

第七章「秋成の隠微」で諸道聴耳世間猿はに即してしは、これまでの論考とは異なる方法、即ちモデル論で書かれており、卷三の三話がいずれも当時の大阪の有名な人物正慶尼を異なる角度から揶揄しているものであることを論じている。その場合、筆者は作品中の片言隻句に着眼することによって裏に隠されていゝモデルをさぐり当て、という方法を用いているが、それは従来の「世間猿」説

解には用いられなかったものであり、新たな読み方を提示したものと見て着目されよう。

第八章「秋成と白水漸伝」―「青頭」に
あける―は、既に指摘されている魯智深物
語と「青頭」の関係ではあるが、魯智深物
語がどのような意味を荷わせられて使われて
いるか、という問題に關しては考えられたこ
とが無いので、これに就いて考察を施した物
である。すなわち、高僧快庵禪師の行動が破
戒僧魯智深の行動と重ね合わせて描かれてい

ることには、快庵にも智深の魔性が潜在して
 いることを語らうとしての事ではなかった
 か、と論いたものである。これは、山僧に記
 して魔仙一如と云う主題が語られてゐる、こ
 う従来の解釈のアンチ・テーゼを出したも
 のである。

第九章 新斎夜話と談義本
 斎夜話の作者が幕臣三橋藤右衛門成烈であ

ることを明らかにし、その問答体が多いとい
 う特徴は、^{様式上の}当時流行の談義本の形式を採り入

水た結果である。ことを述べ、雨月物語なる
 この読本と談義本の間に交渉があったことを
 確認した論考である。

第十章 「雨草紙」と「聊齋志異」は、
 「雨草紙」の全九話の内、七話までが「聊齋
 志異」の話を翻案したものであることを新たに実
 証し、粉本を如何ように改變してゐるかを各
 話に就いて詳論したものであり、「雨草紙」
 が翻案史上に特異な位置を占める作品である
 ことを主張した論考である。

第十一章 「森島中良の『警世通言』書入れ

に『リ』は、東大東洋文化研究所蔵の森島

中良手次の『警世通言』の書入れを調査し、

それから中良の白話小説の読解態度を窺った

ものであつたが、特に中良が四話の出典を書き

込んでゐることを採り上げ、それが現代中国

の小説学者の出典考に先んじた業績であつたこ

とを評価した点は、日本漢学の優秀性を保証

する事例を加えた物として注目されるのであ

る。

第十二章 ^{（一）} 中世二伝奇の作者考には、作者
 の名が明示されている。中世二伝奇の作
 者は、その序言である清田脩史と考へるべき
 である、という考えを、作中の評注に窺えら
 小説観と脩史のそれとが一致することを論拠
 として述べたものである。

第十三章 一 讚極史と 三 国志は、酒
 落本 日 讚極史の行文の到る処に 三 国志演
 義の趣向や設定を踏まえた句が存在するこ
 とを指摘し、二の作品は 日 演義の硬い語を

第二部 長編讀本の成立と展開

下
四
亭
信
奇
花
釵
兒
也
之
下
玉
椿
頭
信

花釵兒の粉本が李漁の望翁十種曲

読本を習作して
ゐる時期の馬琴が
「玉搔頭」

か
う
ど
の
よ
う
な
物
を
学
び
取
っ
た
か
~~ら~~
著
者

し
て
馬
琴
に
一
玉
搔
頭
し
の
存
在
を
教
示
し
た
人

等の問題に就いて考えられている。馬琴自身は書簡の中でこの作品の粉本を「紫釵記」であるとして述べているのだが、作者自身の証言も記憶の誤りという事があるから鵜呑みすべきではないことを説いた論考として注目される。

第二章「金太~~楼~~主人伊藤蘭洲と『鳳凰池』」は、馬琴の周辺に居た伊藤蘭洲という中国俗文学通と大坂の戯作者金太~~楼~~主人が同一人であろう、という考えを種々の資料を用いて考証した論考であり、その過程で『鳳凰池』

という棉靚本の白話小説と金太~~様~~主人の復
 讐栗物語が著者自身というほど密接な関係
 は無いものであることに言及する。従来全く
 着手されてゐる人物と作品とに^{就いて}大幅に調査
 の歩を進めた業績である。

第三章

^{奇説}復讐

稚枝鳩

と石点

頭

は

、

馬琴の半紙本読本の第二弾たる「稚枝鳩」が

、石点頭中の二話「江都市考婦居身」

侯官県烈女鑑仇の筋を使用していること

指摘し、石点頭の備えるエロ・グロ・類

魔性も当時の大衆の嗜好に合致するものとし
て馬琴が導入したのであるうゑ、こ論じている。

第四章「馬琴と『杜鰲新書』」は、稀覯書
たる『鰲術小説』と『杜鰲新書』との話、文化初頭から
文化五年頃までの作品中に馬琴が翻案してい
ることを指摘し、馬琴は『鰲術』の面白さを導入
したのである、と論じている。同時に、『杜
鰲新書』と『馮夢竜編』の増広『智囊補』は同話を
収めていること、前期の『仮名草子』や『浮世草子』

の作者たるも、増高智恵補也、日松齋新書から
 頼村を省つてゐることを指摘し、頼村が
 近世小説の面白味を交える要素の一つである
 ことに注意を促してゐる。

第五章「日三七金伝南柯夢」は、馬琴の三大傑作の一た
 る「日南柯夢」の構成に「日三七金伝南柯夢」のそれ
 が取り込まれてゐることを、先ず考証する。

「日三七金伝南柯夢」の構成は、才子と佳人の離合
 を、二人の出会い―後祝言―別離―才子の節

操―田舎―一大二妻の田舎、
 〇南村夢郎のそれと全く同じ形になっ
 てる。また、〇二度梅金伝の特色は、男性が
 結婚を約束した女性に対して固く貞操を守り
 、という道義を描いている処に在るのだが、
 〇南村夢郎も同一の道義を描いている。荳談
 人情物を製作してゆく時期の馬琴は、粉本の
 筋というよりも基本的な枠組となる構成要素
 を抽出し、それを自作の構成として用いる、
 という進んだ翻案方法を開発している、とい

形を取って描く

う筆名の見解は斬新な物である。また、『南
柯夢』の父子の争論には明の有名な戯曲『金
瓶梅』の父子の争論が取り込まれており、そ
れを導入することによって馬琴は人情の葛藤
を描いてゐるのだ、という見解も著実で説得
力を持ったものである。

第六章「『金石縁』全伝」と馬琴・小枝繁
は、馬琴の近刊予告に『本朝金石縁』の名称が
見える点に着目し、馬琴には『金石縁』全伝
を翻案する計画があったこと、その計画は『

句殿実々記と改題して実施されたこと、
 金石縁全伝の構成は、主人公と令嬢の婚約
 —令嬢の婚約破棄—下女の身替り結婚—令嬢
 の不幸な最後—というものが、句殿実々記
 の構成もそれに合致すること、を論ずる。
 更に、^下同時期の作者小枝繁の『絵本壁落穂』も
 『金石縁全伝』の翻案であることを、筋之行
 文の一致から実証し、同一の作品を粉本とし
 た『句殿実々記』と『絵本壁落穂』の作風の
 相違を論じ、馬琴の作風の優秀さを主張する

。刊行予告から粉本を探索してゆく方法は斬新な物として注目するに値しよう。

第七章「文人の小説、戯作者の小説」
 日錦香亭馬と日絵本沈香亭馬、日平山冷燕馬と日松浦佐川媛石魂録馬——は、矢張り三宅匡敬の「絵本沈香亭馬」が、日錦香亭馬の翻訳とも言えるほどに筋をそのまま取った翻案であることと新たに指摘し、外国文学をあまり改変することなく取り入れようとする点に文人の小説の特色と見出す。次に、馬琴の日松浦佐川媛

石魂録が、平山冷燕の翻案でありながら、これを大きく改変して日本の大衆の嗜好に合わせた作品に変質させていると論じ、そこに専門的戯作者の作風の特徴を見出してゐる。又錦香亭の存在を指摘しただけで、新見の提示と評価できよう。

第十一章

又橋説弓張月と又秋青演義と

は、弓張月らの英雄の一代記という様式、英雄がしばしば挫折し、敵方によって苦しめられ、だからこそ読者の同情を呼ぶという筋

のバージョンは、秋青演義の如き中国の英雄一代記から学ば取られたものであつた。と論いたものであつた。又張月の筋の立て方を貫く原理を指摘してゐる点に、興味深いものがある。

417
第九章 「馬琴談本の漢詩と」南宋志伝は、狂詩選とは、櫓説の張月の十首以上の題詞が、南宋志伝とは、楊家将演義から取られてゐること、馬琴のたゞの作品の内には引かれてゐる漢詩は、都賀庭鐘編の狂詩選から

う取られたものであること、
 新たに指摘し
 ている。

第十章「青砥藤綱模稜案」と「清顛大師
 醉菩提全伝」は、馬琴の「模稜案」中の一
 話か「清顛大師醉菩提全伝」から採られたこ
 とと指摘し、三宅喩山の「通俗醉菩提全伝」
 の誤しうと比較して、その相違を述べたも
 のである。

第十一章「朝顔日記」と「桃花扇」の通
 俗金翹伝は、「朝顔日記」のメロドラマと

してのすれ違いの繰り返しという筋の型が、
 桃花扇から学ばれたものであること、
 幾つかの趣向と筋が、金雲翹伝の翻訳たる
 通俗金翹伝から取られたものであること
 を論じている。

第十二章「馬琴と旅路の打聞」は、
 朝夷巡島記と、ハダ伝に清水次臣の紀行
 文、旅路の打聞の中の話が利用されている
 ことを、馬琴書簡の記載から引き出した考証
 である。

第十三章「馬琴の稗史七法則」と毛山の「
 讀三回志法」に「依客伝に即して」「隱微し
 と論ずしは、稗史七法則が「讀三回志法」
 から学び取られたことと新たに指摘し、その
 内の「隱微論」が「讀三回志法」の三回正統論に
 相当するところから、隱微とは大きな政治・
 社会的問題を作品裏にしつゝ込ませる筆法で
 あると考える、
 又「開卷驚奇依客伝」に即して、
 足利時代「訪の裏に」
 この作品の「隱微」とは徳川幕府極盛論と自のび
 込ませた事であると論じたもの、この論文

の発表時から賛否両論を惹起した物であるが、
 馬琴作品にどの程度の政治的諷刺が如何なる
 筆法でなされているかという問題が考えら
 れる際に、無視できぬ物として生命力を保つ
 て行く論考であらう。

第十四章 「日ハ大伝」の蒙育時代——隱微
 し再論——は、対象を「日ハ大伝」に変えて隱
 微の問題を考えた物で、やはり当時の政治的
 社会的問題を間接的な表現方法を用いて描き
 込むのが隱微の筆法であるという立場から、

当時の風俗資料を駆使して『ハダ伝』に当代
 の当込みを見出してゆく。その中에서도大江
 親身衛の虎退治の訪には大塩平八郎の乱が隠
 然とされ、為政者に政治的社会的危機が訴えか
 けられてゐるのだ、という論は、刺激的でも
 あり斬新でもある見解であらう。『ハダ伝』
 の真向からの作品論として研究史上に残って
 ゆく論考であらう。

第十五章『ハダ伝』の小説原理―『隠微』
 三論―は、『隠微』とは政治・社会問題のほ

かに宇宙觀をも作品を支える原理として通底
 せざる算術であつたことを考へ、その宇宙觀と對つ
 原理と「盈^フ虧^ハは虧^ハくし」の原理に求め、それら
 はやはり「易經」など中国古典に學び取ら
 れた物であつたといふと論じてゐる。

第十六章「ハ大伝」の演劇は、岡本綺
 堂の発言を活かして、荒茅山の場面は役者が
 二役で上演するふうになつてゐる、と論証
 する。

第十七章「ハ大伝」の挿絵は、馬琴の

自筆稿本の指示を利用して刊本の描繪には
 落かに当代の風俗批判が描き込まれているこ
 とを論証したものの。可い大仏様の描繪の新た
 る見方を提示している。

第十八章「遠山荷塘」と金瓶梅は、鹿
 児島大学蔵の「金瓶梅」の早本に中国俗文学
 の遠山荷塘の癸言の書込みと見なされる物が
 あることを紹介し、荷塘とその周辺の人々の
 「金瓶梅」や白話小説の読み方に就いて述べ
 ている。「胡言漢語」が荷塘の著書であるこ

とを確定するると、細かい事ではあるが、親
見の提示も幾つかある。

第四部 読本と近代小説

第一章 「後南朝悲話」庭鐘・馬琴・逍遙・
しは、未刊に終った「開卷驚奇俠客伝」のそ
の後の構想を資料に拠って推測し、次に庭鐘
の「可笑句用」・「大高何某義を勵し影の石に賦
を射る話」の粉本が「吉野旧事記」であるこ
とを指摘する。更に、坪内逍遙の「開卷悲憤
慨世士伝」(「ロエンジールの翻訳」)が「依

客伝のどのような影響のもとに成立したものであるかを考え、逍遙はワリエンジンに
 曰く客伝が完成した時の姿を見出していたのだと論い、小説を近代化しようとする逍遙の深部に馬琴歌謡の残影が消え難く存するのとさま張する。その論の過程には曰く客伝の中の如摩姫伝が実録の明智光秀養女盛姫之伝とを粉本としている。という注目すべき指摺が行なわれている。

第二章 「幸田露伴と曰くハ大伝に」 写実性の

発見しは、ヨハダ佐の二回から二回
 までの筋を明治風に変容させた「其第今様ハ
 大信しを取り上げ、そ本がヨハダ佐にはそ
 の当時の人間を写實的に描いてい子知がある
 という露伴の主張に基いた作品であること
 論い、更にそれに解発されてくヨハダ佐の字
 實性を再評価すべきだとする筆者の論を展開
 する。露伴とヨハダ佐の関わり、ヨハダ佐
 の新しい読み方、に焦点をすえた最初の論、
 と言えらる。

以上の記述から窺える如く、本論文の何よりの功績は、多くの作品の典故や筋本を実証を以て新たに発見し指摘してゐる処に在る。それは、~~必要とする~~ 当該作品を読もうする人々が基礎的な知識を提供した物として、今後永く利用されてゆく事と思われる。また本論には、稀覯書でありが故に中国の研究界にも日本中国文学者にも研究の触手が及ぼされてゐなかつた中国小説に就いての多くの記述が存する。それは中国文学研究者

かうも参照されてゆくと思われる。

更に、そのような基礎的事実を踏まえた上で、作品論と日中双方の性格小説のの同異の比較論も、着実な文芸論と文化論として永く影響力を持ち続けるであらう。

但し、本論の内には、多くはないのであるが、推測で物を言っている箇所や深読みし過ぎるのではないかと他からは思われる可能性が存する部分も無くはない。そのようなところが研究者に利用されてゆく生命力を持つか否か

は、今後の研究の進展が自うに決めてゆくであらう。また、筆者も序章や後記に言及する如く、本論の主題に関わる問題は、まだまだ存している筈である。筆者が今後ともそれらを追求め深めて行くことを期待したい。